留萌の医療事情についての雑感

留萌医師会
留萌記念病院　院長
三　輪　英　則

「医師不足」。一部ではそれを偏在と評する向きもあるようですが、その状況は全国あらゆる地域で語られているようにこの留萌地方でも例外ではなく、私も地域医療に携わる者のひとりとして、また留萌市民のひとりとして日々、他の地域と同様あるいはそれ以上に実感としてひしひしと感じているところです。

いま日本中のいたるところでみられるように、留萌圏域でも地域医療の抱える問題は（財政的な問題も含め）かなり難しいところがあるようで、留萌においても、あるセンター機能をもつ病院は一時的に医師不足のため一部の診療科を閉鎖せざるを得ない状況になりました。そのような科は市内に専門医が不在となるため、専門医の診察を受けるためにはその都度バスや電車などで１時間近く（冬季はそれ以上）かけて深川市まで出向かなくてはならない、ということになります。

当院はベッド数117床の医療療養型の病院ですが、そういった地域的な事情もありますので、昨年春より専門外の患者さんでも容体が安定している方につきましては、当院外来でも一部診察、処置をさせていただいております。最近になってセンター病院の医師数も増加し体制が持ち直してきたようですが、当院としましても本来の療養型病床としての役割にとどまることなく、さらに何らかの形で地域のお役に立てればと思っております。

また、留萌市以外にも難しい立場にある病院があります。そこは小平町から苫前、初山別、遠別、幌加内、場合によっては天塩、幌延、さらには天売、焼尻といった離島までと極めて広大な範囲をカバーする留萌北部の要地であり、この圏域で患者さんが緊急を要する病態になれば、まずその病院に救急搬送されます。そこの常勤医が昨年秋から４名にまで減少し、このままでは夜間、休日を含めた救急対応が困難になることが予想され、常勤医の招聘が緊急の課題となっております。しかしながら医師不足はいまや全国的な問題であり、早急に常勤医を充足させるのが困難な状況なのは周知の通りです。その中でも常勤医の負担を少しでも軽減し、地域医療の崩壊を防ごうと、多くの応援医師が非常勤医としてその病院を支えています。

実は当院からも外来診療支援として２名、道の依頼によりお手伝いをさせていただいております。もちろんそれは当院だけのことではなく、留萌にとどまらず旭川や札幌その他の地域に至るまで、多くの医療機関の諸先生方が留萌地方の医療を守らんと日々ご尽力されております。地域医療の崩壊を何とかギリギリのところで食い止めるため、「困った時はお互いさま」ではないですが、われわれとしましても今後できるだけ留萌の医療を守るお手伝いをしていきたいと思っています。

ところで、「医師不足」は全国共通の悩みでありますが、大病院の看護師獲得競争の影響もあってか中小病院では「看護師不足」にも頭を悩ませていると聞きます。当院では現在、留萌だけでなく羽幌、深川、あるいは札幌まで看護スタッフの送迎をすることで、必要十分な人員を確保しております。しかし留萌には現在看護学校がなく、将来的な看護師の確保に対する展望は不透明と言わざるを得ません。そこで、当院は数年前より、当院もしくは関連施設に勤務し、看護学校への進学を希望する介護職員に対して、試験に合格する学力を養成するための受験指導を始めました（教育は私が完全ボランティアで行っています）。これで当院は自力で看護師を養成し、職員は働きながら看護師の資格を得ることができ、その結果、職員に少しでも夢と希望を提供できれば、と期待しています。

今後も中小病院の運営は、特に過疎地においてはますます厳しい情勢が続くと思われますが、地域の信頼を得られますよう引き続き努力してまいりたいと思っています。